

肥満と産婦人科疾患

—最新知見と実践アプローチ

企画者のことば

松村謙臣

近年、肥満に対する医学的アプローチが大きく進歩しています。とりわけ、GLP-1 作動薬をはじめとした抗肥満薬の登場とその臨床応用は、これまで生活指導や外科手術に限られていた肥満治療のパラダイムを大きく変えつつあります。肥満は、2 型糖尿病や心血管疾患といった内科的疾患にとどまらず、多くの産婦人科疾患とも密接に関連しており、その影響は不妊症や月経異常、周産期合併症、さらには子宮体がんの罹患や死亡リスクにまで及んでいます。

しかしながら、われわれ産婦人科医のなかにはこうした最新の肥満医療の知見が十分に共有されておらず、実臨床において肥満患者への対応が不十分なケースがほとんどだと思われれます。産婦人科診療の質を高め、患者により安全かつ効果的な医療を提供するためには、肥満に対する理解と対応力の向上が急務と考えます。

本特集号では、肥満の定義や診断、合併症の整理に始まり、不妊症や周産期合併症、子宮体がんといった産婦人科疾患における肥満の影響、さらに周術期管理や鏡視下手術、麻酔管理といった実践的なトピックに加え、最新の食事・運動療法、漢方治療、抗肥満薬、減量手術に至るまで、幅広い視点から肥満と産婦人科の関係について取り上げます。

読者である産婦人科医の皆様が、本特集を通じて肥満医療の全体像を把握し、実際の診療に役立てていただくことを願ってやみません。本特集号が、産婦人科診療の質的向上と、肥満を抱える患者さんへのよりよい医療提供の一助となれば幸甚です。